



結 yui



2024.1.20 No.115

発行：憲法9条の会つくば

〒305-0004

つくば市柴崎68-103

Tel/Fax 029-858-2034

国際社会の反戦理性の拡大に信頼と希望を抱く

田村武夫・茨城県九条の会連絡会代表

ロシアによるウクライナ侵略、イスラエルによるガザ地区攻撃が止まりません。大国の、こっちはよい、あつちはだめ、といった二重基準=ご都合主義が災いしています。

第二次世界大戦後、国連憲章によって戦争が違法とされ、武力行使と武力による威嚇が禁止されました。加盟国の領土保全と独立の尊重、紛争の平和的解決も義務づけられました。

戦争になった場合でも許されない行為がジュネーブ諸条約などの国際人道法で規定されました。一九四七年に結ばれたジェノサイド条約は、民族、人種、宗教など集団に対する殺害、迫害を犯罪として禁じています。

こうして、国際社会の反戦理性が確実につよくなっていることが看取されます。国連憲章と国際法を守れという声が多数となり、国際社会を動かしてきています。もう一歩です。

ウクライナ侵略に続いてガザ攻撃でも、国連総会が国際社会の意思を示す役割を果たしました。「即時の人道的停戦」を求める決議は加盟国の八割にあたる一五三カ国の賛成で採択されました。

どの国であれ、国連憲章と国際法を守らなければならない、という一点で結束を築く主役となっているのが二〇世紀に植民地支配を打ち破って独立した国々です。

東アジアでは東南アジア諸国連合(ASEAN)が、東南アジア友好協力条約(TAC)を締結し、かつて分断と敵対が横行した地域を、平和と協力の地域に変えてきました。さらに、TACの原則をもとに、東アジア規模の友好協力条約を展望するASEANインド太平洋構想(AOIPY)が進められています。対立を深める米国と中国、ロシアも含む枠組みです。

日本がなすべきことは、大軍拡でも、米国言いなりの外交でもなく、ASEANと協力してAOIPを共通の目標に据え、憲法九条を生かした平和外交に徹することです。

一方、史上初めて核兵器を違法とした核兵器禁止条約が「希望の光」として輝きを増しています。

年末に開かれた核兵器禁止条約の第二回締約国会議は、「私たちは、現在および将来の世代のために、核兵器のない世界を実現するために不断に努力する」「(核兵器の)完全廃絶まで休むことはない」と表明する政治宣言を採択しました。

二三年九月にインドで開催された二〇カ国・地域(G20)首脳会議は、前年に続き、「核兵器の使用又はその威嚇は許されない」(首脳宣言)と表明しました。この宣言をロシアもアメリカも受け入れ、採択されたことは重要です。インドネシア、ブラジル、南アフリカなど禁止条約を推進する国々が、大きな役割を果たしました。禁止条約と、条約を生み出した力が、核兵器使用の手を縛っています。

第二回締約国会議は、二五年の次回会議までに「核抑止」論からの脱却を訴える報告書を作成することを決め、新たな段階の取り組みを始めようとしています。禁止条約の法的な規範力と、諸国の政府・市民社会の力が合わさり、核兵器廃絶を促進する新しい時代に入りつつあります。

日本政府は二二年に続き、第二回締約国会議へのオブザーバー参加すら拒否しました。

二〇二五年は広島・長崎の被爆八〇年です。国際社会の反戦・反核の運動に連帯して被爆者の悲願である「核なき世界」を一日も早く実現するために闘いましょう。



〈1月7日「つくば市20歳のつどい」で、振袖の女性に「9条の会」のポケット・ティッシュを渡す長田さん〉





9条の視点から・・・“戦没者の名前だけが並ぶ石碑”のこと

佐々木 啓 (茨城大学・人文社会科学部)

2023年5月、「茨城の戦争遺跡——身近に残る戦争の記憶」という動画を公開した。これは、ピースアクション実行委員会の依頼を受けて、私のゼミ（茨城大学人文社会科学部日本近現代史ゼミ）が制作に携わったもので、県内の小中学生向けに戦跡を紹介する内容となっている。詳細については割愛するが、県生協連のサイト (<https://x.gd/xd5fy>) で観ることができるので、是非ご覧いただきたい。

若者たちが戦争について語るという趣旨が目をついたのか、動画撮影中から多数のメディアの取材を受けた。戦後80年近くを経て、最近の若者が戦争の記憶とどのように向き合おうとしているのかは、大きな関心事なのだろう。今の若者は「右傾化」しているなどと言われることも多く、戦争の惨禍に対する感度が弱くなっているとも指摘される。年配の方々の間では、先行きに暗澹たる思いを持っている方も多いのではないかと思う。

では実際のところ、若者たちは戦争や平和についてどう考えているのか？ 1、2年生向けの戦後史の講義のなかで、憲法9条の改正の是非について尋ねてみた。結果は、改正に賛成が39%、反対が46%、どちらともいえないが15%であった（2023年12月、78名対象）。やや反対が多いものの、賛成を圧倒するには至らず、迷いが感じられる。昨年5月3日付の『朝日新聞』の世論調査では、賛成37%、反対55%となっているので、全世代の平均と比較して賛成が特別多いわけではない。

理由について聞いてみると、賛成の学生は、昨今の東アジア情勢やロシアのウクライナ侵攻を挙げるものが多かった。一方の反対の学生は、“防衛力”については現状で十分と考えているものが多い。18～20歳の学生は、皆それなりの知識を持ち、それなりに悩んでいるのであって、そういう意味でも他の世代に比べて大きな違いはない。私も含め、他の世代の護憲派は、若者たちを警戒し過ぎているのかもしれない。

一方で、戦争・平和に関わって、若い世代の新しい感覚を感じることもあった。4年ほど前、ゼミで茨城県内の戦争慰霊碑について調査しているときのことである。学生に「どのような慰霊碑が一番印象に残ったか」と尋ねてみたところ、ただひたすらに戦没者の名前だけが並ぶ石碑だ、との回答があった。巨大なものや、奇抜な形のものなど、個性的な慰霊碑はたくさんあるのだが、なぜ名前しかない地味な石碑を選んだのだろうか。学生によれば、主張の明確な石碑は、どこか意見を「押し付けられている」感じがするそうだ。むしろ一切主張を書かず名前だけが並べられることで、亡くなった人たちの存在感が強く感じられ、戦争で生命を失うことの重みが切実に伝わってきたのだという。

私自身は、「慰霊」や「顕彰」など、石碑に書かれた言葉を（賛否は別にして）「押し付けられている」と思いながら眺めたことはなかったので、この意見はとても斬新に感じられた。しかし、そう感じるのは私が中年・男性・大学教員という立場の人間だからかもしれない。年齢、性別、社会的地位などの点で、自分より立場が上と目される人たちが何かを主張している時、「一つの考え」というよりは、「正しさの押しつけ」と感じられる——若者が生きている世界は、実はそういう世界なのではないかとも思うのだ。

少子高齢化で若い世代には重い経済的負担が課されている。地球温暖化や環境破壊という面でも先行きが不安だ。日本経済は「失われた30年」ですっかり落ち込んでしまった。そこに第三次世界大戦の危機すらじわじわと迫ってきている。考えてみたら現在は、若者たちにとって希望が持てる時代とはとても言いがたいのかもしれない。

こんな状況なのに若者たちはなぜ運動を起こさないのか、と思いたくもなるが、若者にとって権力に歯向かう術はあまりに限られている。議会が自分たちの意志を実現する場であるという感覚はほとんどなく、労働運動や平和運動で理想を実現するというイメージもなかなか持てない。学校教育のなかで、民主主義や基本的人権の理念と、それらにかかわる制度・法律について一通り教えられているのだが、実際には教えている方も含めてリアリティがないのだ。作家の雨宮処凛は、現在「どうせ世の中も人間もロクなもんじゃない」という意識が広がっており、そうした状況では「理想を語る人が嘘つきの詐欺師にしか見えない」と述べている。だから、「現実がひどければひどいほど意地悪そうな人が支持を集めるのだ、と（「雨宮処凛が行く！（第639回）」<https://x.gd/V8mqb>）。

戦没者慰霊碑の文言を「正しさの押しつけ」ととらえる感覚は、こうした若者の境遇や意識と重ねてとらえる必要があるのかもしれない。「正しさの押しつけ」を避けようとする姿勢は、彼/彼女らにとって、欺瞞に満ちた世界を生き抜くための一つの「技術」であり、それはそれで切実な要求と結びついているのではない。

では、私たち九条の会の言葉が言葉通りの意味で若者に届くためにどうしたらよいか。答えはまだまだ分かりそうもないが、私は“戦没者の名前だけが並ぶ石碑”に少しこだわってみたいと思う。そして、多数の人びとを大きく括る言葉からではなく、一人ひとりの痛みや願いへの想像力を伸ばすところから、思考を進めていきたい。

東海第二原発の再稼働、今年が勝負

～ 住民の力で止められる！～

大石 光伸（東海第二原発運転差止訴訟、原告団共同代表）



○はじめに

パレスチナでジェノサイドが公然と行われ、人間でいることが絶望的な思いに沈む。「人倫の奈落」である。

日本もこの集団虐殺に加担して、かつて日本が朝鮮半島、中国、台湾、東南アジアで行った歴史行為などなかったかのようにイスラエルの植民地主義暴力を支持している。

「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」と宣言したわが国の憲法はどこへ行ったか。

13年前、福島の人々はパレスチナの人々と同じように家を追われ「難民」となった。追い打ちをかけるように差別され棄民化された。原子力災害は社会的・構造的暴力以外の何ものでもなかった。原発が核兵器と表裏一体であり、被ばく国が自ら国民に被ばくを強いることも明らかにした。

デブリも取り出せず汚染水も放出して、再び地震に襲われれば原子炉は倒壊する可能性さえある中で、国は米国に倣って福島を軍事研究拠点とした。国際原子力勢力は国連科学委員会（UNSCEAR）を使って福島原発事故の被ばくレベルを小さくし、福島での小児甲状腺がん多発の因果関係を否定してゆく。事は世界勢力である。

○2022/2023年の原発回帰

住民を難民化させて棄民した東電福島第一原発事故から12年後の2022-23年は原発回帰へのターニングポイントの年だった。

原発事故の責任逃れを続けた国は、2022年6月、国賠訴訟最高裁で「国の過失を認めない」判決を書かせた。これで国は公然と原発回帰に舵を切った。

判決翌月には内閣官房「GX実行会議」を設置。原発を脱炭素エネルギーとして「国が再稼働を支援する」方針を表明。そして翌2023年3月に「GX脱炭素法」を成立させる。原子力基本法、原子炉等規制法、電気事業法、再処理法、再エネ特措法の5つの法律を改正して、老朽原発を含む原発再稼働の法的枠組みを整備した。

国は2023年4月「原子力政策地域会議」を設置して立地自治体首長を招集して政府方針を徹底させ、経産省職員100名で構成する「地域支援チーム」による原発立地地域自治体への直接指導（介入）がはじまった。

○東海第二をめぐる動き

首都圏の原発＝東海第二原発の再稼働は彼らにとっても突破口として位置付けられ、経産省による県・自治体職員への指導は非公開で水面下で行われている。

国の動きに呼応して県議が扇動する政治役割を演じ、「すべて自治体が背負う必要はない」「とにかく自治体避難計画を作り、実効性は国が責任を持つこととさせる」「新規制基準で放射性物質の外部放出を大幅に抑える設備が要求されて

おり、（避難しなくても）放射線の影響は受けないか、ごく軽微で済む。こうした情報が県民に伝わっていない」とぶち上げ、これに知事・首長が連動した。

茨城県は原電に対して「拡散シミュレーション」の提出を要請。原電はその意図を汲み、住民避難が30km圏内に収まるようなシミュレーションを提出した。これを使って県は「工学上考えられない事故でも最大17万人避難で済む」「これで避難計画の実効性を検証する」と屈辱づけ、行き詰まっていた広域避難計画の突破を試みている。

地元東海村は原電出身の村議が代表を務める商工会から再稼働推進の請願を提出して、議会で強行採決。東海村長は県議の発言に沿って「とにかく避難計画を作る」として年内に発表を宣言して12月村防災会議で避難計画を決定した。これに日立市が続く。

これらのシナリオは経産省の仕込みである。彼らの当面の目標は、県・自治体の避難計画を揃え、東海第二地域防災協議会で「緊急時対応」をとりまとめ2024年中に官邸「原子力防災会議」で了承を得ることで、地元「同意」の外堀を埋めることにある。

○住民運動の課題

東海第二地域は、一つに、東海村前村長村上氏が残した地元6市村首長懇談会による「同意権拡大」の成果がある。6市村首長への国からの圧力は必至である。「6市村すべての同意なしには再稼働できない」ことを支えられるのは住民である。

二つに、東海第二原発は首都圏の原発で被害は首都に及び、避難先も県内全域、周辺5県に及ぶ。福島第一原発事故の被災経験に根ざした反対運動の基盤がある。立地自治体の住民のみならず、県内・首都圏の広範で多様な住民運動は重要である。

三つに、2021年の水戸地裁判決は彼らにとっての足枷である。県は原電シミュレーションを使って「最大17万人避難で済む」という論理で水戸地裁判決に対抗しようとしている。意図的過小シミュレーションであることを市民運動で暴露し、裁判でも争うことが必要である。

四つに、原電や国が再稼働を焦れば必ずミスが発生する。今回の防潮堤基礎施工不良と隠蔽はその一端である。規制委員会のそれに関わっている。不正や違法行為を抉り出すことである。

五つに、行政文書記録を残さないために水面下で行われている「勉強会」や、経産省「地域支援チーム」による県・自治体への指導（介入）の情報をつかみ、そのすすめ方を暴露することである。

最後の抵抗手段として、燃料装荷の差止の仮処分申立を起こす。

植民地支配と集団虐殺に対するパレスチナ難民の抵抗と同様、原発による被ばくと難民化への抵抗は根を同じくする。忘却の歴史に抗して民衆が人倫を救い上げる闘いの過程でもある。

「川柳」で、世相を斬る!!

昨年11月10日付の朝日新聞の読者川柳にあった句です。



- イスラエルが 教えてくれた 「自衛権」 (茨城県・岩井廣安さん)

「自衛」という名で始まる「戦争」。犠牲になるのは、罪のない市民、子どもたち。それなのに、「自衛力」を強化することが必要だと国民に思い込ませようとする政治家。そのまやかしを、この川柳は射抜いています。

つくば市在住の「フクスケ」さんから、週刊金曜日に投句してきた川柳の寄稿がありました。世の中の問題のエッセンスを、五七五で切り取って考えるのが習慣になっているそうです。



- ハマスへの報復に、ガザ市民の犠牲は必要ありません。
- 「ヴェニス商人」のシャイロックへの言葉借りて、
- ネタニヤフ 肉を切るなら 血は流すな
- 一人殺せば「殺人」 万人なら「戦争」
- 日本国憲法の前文を、世界に広めたい。
- 過ちの 「政府の行為」 させるまじ
- 軍拡に進む岸田政権は、「自覚なき戦後最悪の反動政治」と言われます。
- 軍拡も 原発・マイナも みな岸田
- 軍産官 こそつて戦争 準備する
- 戦争を 必要とする 武器商人
- 米兵器 爆買のツケ 国民に
- でも、私たちは、
- 人殺す ための税金 払いません
- 「命よりカネ」「今だけ金だけ自分だけ」の政治家は要りません。
- 財源が 決まった頃は 職になし
- 原発も 処分するのは 後の人
- 教団と 一票格差で 得た議席
- 自身の旧統一協会幹部との面会が報じられると、
- 更迭した ヤツらと同じ 首相の弁
- 派閥パーティー問題で追及されると、
- 「危機感」って 政権維持の 危機の意味
- 「聞く耳」を持たない岸田政治。
- 答弁の 言葉に中身 ない首相
- 結局は 「聞く耳」相手は 強い人



- 広島の平和記念式典の挨拶では、
- 首相だけ 「核禁」言わぬ 不思議な図
- 核の傘 終末時計を 進めてる
- 抑止論 北のミサイル 認めるか
- 政権の根っこにあるのは、「人権」への無感覚。
- 杉田水脈(みお)に甘い自民党。
- なぜ水脈を 切れぬか 本流だからです
- 同性婚に否定的な岸田首相に、その理由の言葉をそのまま返したい。
- 軍拡で 「社会のあり方 変わっちゃう」
- 「人権無視」は、いたるところに。
- 人管法 国家が主導 するイジメ
- 生命の 尊厳こそが 平和の礎
- 辺野古の埋立て強行は、
- 金を撒き 分断させて 海壊し
- 福島での「処理水」放出は、「一定の理解を得た」と。
- 放出に 裏でどれだけ 金積んだ?
- マイナ保険証の強行も、止めたい。
- 個人情報 マイナカードで 丸裸
- 任意なのに強制 それって 戦時下
- 今こそ、憲法9条の価値をすべての人が共有したい。
- 最高の 防衛力は 不戦なり
- 銃規制 憲法9条 核廃絶
- 二〇二四年が、世界が平和へ踏み出す年になりますように。
- (フクスケ)



NHKスペシャル「シリーズ 太平洋戦争 1942,1943」



表記の番組が12月7日・8日の深夜、連続で放映されました。私が生まれた頃を描いているので興味がありました。

「先の大戦」から「歴史的教訓」を学ぶことは、日本国憲法制定の原点です。現在の戦争に向かう国づくりを押しとどめる力にもなると思います。

【太平洋戦争 1942】

1942年4月18日、開戦して5ヵ月、太平洋戦線でアメリカが優勢となり、空母を発進した爆撃機が初めて東京を空襲した時の驚きを、乳飲み子の母・金原まさ子が記しています。

以後、本土の大都市への爆撃が続きます。勝ち進んでいたはずの戦況の変化について情報がないことがもどかしいと、山本周五郎や伊藤整が日記に綴っています。日米の形勢逆転後は、戦況報道は、大本営発表に統一されます。

米空母を叩く目的で行われたミッドウェイ海戦（42年6月5日）では、日本海軍は空母4の損失、死者3,000人を出します。海軍報道部は事実の公表を考えますが「国民をあざむくことやむなし」という上層部の判断で、日本の被害は2分の1、戦果は2倍という虚偽発表が行われます。

以後、損害は事実の5分の1、戦果は6倍などの発表が普通になって行きます。1943年1月ジャーナリストの森正蔵は、「虚構に身をゆだねた日本」と記しています。

42年6月頃、内地の榎原喜佐子は、物不足が強まり、買い物物は切符制となった生活の不便さを記しますが、マニラ、ジャワ、シンガポール、サイゴンが攻略されたら物資は手に入ると期待させられます。

【大東亜共栄圏を掲げた南方の状態】

インドネシアで従軍する榎原政春によると、オランダからの独立解放を約束して占領した日本軍が現地で、1万人近くのアムステルダム・フィリピン軍捕虜を死なせた「パターン死の行進」が起きます。

ソロモン諸島（ジャワ島北）のガダルカナル島では、米軍に占領された飛行場を奪還する凄惨な特攻攻撃が行われ、丘一つが日本兵の血で染まったと記録されます。

結局6,000人を戦死させ、15,000もの人をマラリヤと飢餓で死なせた日本は、ようやく42年12月31日にガダルカナル撤退を決めます。この敗北は「転進」と言い換えられます。

【太平洋戦争 1943】

子料練があった霞ヶ浦の景色で番組は始まります。ここでは、

14～17歳の少年兵が戦争動員されます。戦況が悪化すると年齢は15～20歳、身長151cmとされます。全国の中学に志願がノルマ化され、長野県南向村では80%に当たる453名が志願しました。この年12月には、神宮で雨の中、多勢の学生服の若者が行進する学徒出陣式が行われました。

この年、徴用工となった竹鼻信三は、「銃後第一線で戦う誇り」と日記に書き、武器弾薬の生産に邁進します。しかし、人々の生活はますます苦しく、農村に米がなくなります。永井荷風は、「千住に行ったが佃煮屋はなくなっていた」と書きます。反戦思想調査が厳しくなり、賃金値上げは一切拒否され、その反動で「手抜き作業」が横行します。

南方戦線ジャワのブーゲンビルでは、第16設営隊の赤羽恒男は、物資の輸送が途絶えたので、ツルハシとスコップの手作業で飛行場作りを行ったと書いています。4月18日視察に飛来した山本五十六長官の機が撃ち落とされます。

北方アリューシャン列島では日本軍の守備するアツ島に、5月15日米軍3万人が上陸し、激戦となります。

5月29日、山崎守備隊長以下2,600人（殆どが負傷兵）が米軍陣地に突撃し、全員が戦死します。番組では、背景に「降伏は許さない」との軍の方針があったと語られます。当時世論はこれを「玉砕」と美化します。「銃後」はますます「戦うしかない」という雰囲気になって行きます。

南太平洋のクラワでは、16,000人の米軍に4,600人の日本軍が、自爆攻撃を行います。赤羽の第16設営隊は、撤退のため指定された海岸で救援の艦艇を待たせられますが、ひそかに幹部連だけが乗船して去り、赤羽達は「置き去り」にされます。

12月、本土霞ヶ浦子料練では、大規模訓練が行われます。在籍人数は前年の2,000人から2万人となります。

佐藤礼子の17歳の弟・健一郎も応募し、特別攻撃に参加します。番組はサイパン島での死亡を示唆し、この戦争で、多くの若者の命が失われたと語り、二晩にわたる放映は終わります。

見終わって、あの戦争の進行の中、日本の指導者らは、軍の面子や間違った価値観（天皇のため）などに左右され、戦争をどう進めるか（停戦も含めて）の判断を鈍らせ、本来生きていられた多くの若者や関係者を死へ追いやったのだと、重い感慨を覚えました。（三浦）



大江健三郎『沖縄ノート』を読む会 第1・2回の報告

憲法9条の会つくばでは、大江健三郎さん（2023年3月、没）の著作『ヒロシマ・ノート』に続いて、『沖縄ノート』を読む会を開催しています。11月23日に第1回、12月21日に第2回が開かれました。各回9名ずつ（延べ11名）が集まって、本文を読み進めつつ、活発な討論が交わされました。

大江が幾度も沖縄を訪れ、本書を著した1969～70年は、ベトナム戦争（1965年～）が泥沼化していき、沖縄では、嘉手納基地でB52戦略爆撃機（ベトナムに出撃）が墜落炎上事故を起こした（68年11月19日）後でした。基地と地下道でつながっている弾薬庫には核兵器が保有されており、「核の恐怖」が現実のものになりました。68年12月14日、「生命を守る県民共闘会議」が結成され、「本土復帰」と「命を守れ、非核化」が一体となった要求の実現をめざす運動（ベトナム人民との連帯も意識にのせつつ）が起きます。

全軍労（米軍から給料をもらっている労働者たち）は、1969

年「2.4 ゼネスト」への参加を決議しますが、米軍は、スト参加者を解雇すると警告しました。基地労働者が働かなければ、戦争は止まってしまうからです。沖縄と米軍と日本政府の緊迫したやり取りの末、「2.4 ゼネスト」は中止になりますが、米軍はスト計画への報復として、全軍労関係者を大量解雇します。

一方、1969年11月22日、佐藤・ニクソン日米首脳会談（第5回）で、「1972年、施政権返還、核抜き、本土並み」が合意されました。しかし、実際には「核持ち込み」の「密約」が交わされていました。

プロローグ (1969年1月)

1969年1月、沖縄返還運動の活動家であり、沖縄県人会事務局長である古堅宗憲（ふるげん そうけん）さんが、東京での火災事故で急死した（享年38歳）との報に接した大江は、古堅さんの死を悼む文章を書こうとします。

古堅さんは、「その優しさの底に、もっとも鋭く激しい怒りを据えていた」人でした。それは、理不尽な戦争とその後の軍事的植民地支配の下で、粘り強くたたかいを続ける沖縄の象徴と言えるでしょう。大江は、古堅さんをはじめとする“人間”を通して“沖縄”を考えていきます。

I 日本が沖縄に属する (1969年6月)

「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という命題を抱えて、大江は沖縄に行きます。沖縄について、最初は「無知」で「想像力の欠如」があった大江は、やがて、「憲法の体裁を一応は整え続けることに成功しているかに見える本土」からの「同胞への連帯の手を差しのべることを拒む」沖縄を感じるようになります。

サンフランシスコ講和条約で、国際社会への復帰を果たした本土から切り離されて、米軍が自由に統治権を行使できる軍事的占領下に置かれた沖縄への「差別」……。「今日の日本の実体は、沖縄の存在の陰に隠れて、ひそかに沖縄に属することによってのみ、今かくのごとく“にせ”の自立を示し得ているのだ」。

II 『八重山民謡誌』'69 (1969年7月)

1950年に創設された琉球大学の第一回入学生で、詩人にして沖縄の新聞記者である新川明氏は、大江に「畏怖の思い」を起こさせる人物でした。穏やかで地道に持続する仕事の中にある「怒りと絶望の深さ」に、痛みを感じます。

かれが編纂に協力した『八重山民謡誌』は、「（強制移民、人頭税による搾取、明治政府による「琉球処分」と続く）四百年間、専制政治の下に呻吟して、孤島苦ばかり嘗めさせられた南島人——すなわち沖縄人の心情を吐露したものでした。

沖縄で語られる言葉が、「漠然」として「あいまいな言いまわし」であることを、大江は絵画の「迷彩網」にたとえます。B52が沖縄からベトナム爆撃に発進しているという事実もそうでした。B52の墜落・大爆発によって「迷彩網」が取り除かれた時、「実在しない」と開き直るのか、実体を「正当化する」のか……。炎上事故の後、「ここに現実に核兵器がある」ということを、米軍はその確認の機会を与えず、日本本土の政府は沈黙するか、あからさまに“シラ”を切り、そして民衆の運動が核兵器を撤退させるだけの力を持たない以上、言葉による追及は、前に進むことができませんでした。那覇港の記からコバルト60が発見された時も、米軍の毒ガスによる事故が頻発しても、事態は同じでした。

「行き止まりの壁に打ちあてられて血を流す頭があるのみ」

というパターンは、「怒りを内部に凝縮させ」ます。「拒絶にみちた強靱な沈黙」が、大江が沖縄で感じた人々の姿でした。

III 多様性に向かって (1969年8月-9月)

「日本人とはなにか、という問いかけにおいて、僕がくりかえし検討したいと考えているところの指標の一つに、それもおそらくは中心的なものとして、日本人とは、多様性を生き生きと維持する点においては有能でない属性を備えている国民なのではないか、という疑いがあることもまた、言わねばならない。多様性に対する漠然たる嫌悪の感情が、あるいはそれを排除したいという半ばは暗黙の内なる衝動が、われわれのうちに生き延びているあいだ、現になお天皇制が実在しているところのこの国家で、民主主義的なものの根本的な逆転が、思いがけない方向からやすやすと達成される可能性は大きいだろう。そのとき、《天皇は、日本国の象徴であって、この地位は、主権の存する国民の総意に基づく。》という憲法の言葉は、そのまま逆転の根本的な役割を荷いうるだろう。」

日本人の属性としての「多様性」に対する嫌悪感、排除の衝動——という指摘は、この時代にあって、大江の本質を洞察する力を示しているのではないのでしょうか。「天皇制」に象徴される家父長制的価値観に縛られていることは、現代の保守層にそのままつながります。そして大江は、憲法の第一章・第一条を引用しながら、そのコペルニクスの転換を示唆します。それは、戦後体制の「三位一体論」（＝敗戦国日本は、「天皇制」の存続を望み、米国も戦後統治にそれを利用しようとした。しかし、皇国史観に基づく軍国主義の復活はあってはならないので、「平和憲法」の体制を作った。けれど、日本の防衛のために、「日米安保条約」を締結した。）の根本的な転換の方向性を示すものでもあります。

そのうえで、「三位一体」の日本の「安全保障」のために米軍基地を押しつけている沖縄の軍事的な問題が記されます。「大陸に向かって行われる島国の核武装は、もっとも大がかりで効果は保証つきの、国ぐるみの自殺計画である。」「数発の核兵器による報復攻撃で潰滅するのが、その島国のすべての人間の確実な、近い未来図であることを意識しつつ、その狭い島国の強権が核兵器を開発して、ミサイルの先端を広大な大陸に向けておこうとする構想は、その国の民衆から見れば、端的に気がいじみている。」——半世紀余り前の大江の記述を、今日の日本の「強権」は、どう受け止めるのでしょうか。

太平洋戦争末期の本土防衛のための「捨て石」として戦われた沖縄地上戦。戦後の米軍の「不沈空母」として基地が集中する沖縄。本土復帰に当たっても「核密約」が交わされた沖縄。現在も米軍の世界戦略基地として建設が強行されている辺野古。敵基地攻撃のミサイル基地が新設される南西諸島。

沖縄は、日本にあって、常に差別されてきました。「小指」の痛みは「全身」の痛みだという認識があれば、こういう沖縄の位置づけにはならないはずで。

(後藤)





● 憲法9条の会つくばの活動から

当会では毎月第3日曜日に定例署名、9日に9の日署名を行なっています。その他、「戦争をする国づくりNO@つくば」と共に、毎月3日「9条改憲NO!3の日市民スタンディング」を行ないます。

- ◆賛同人 2024年1月1日現在
総数1004名（つくば市内712名）
- ◆憲法改悪を許さない全国署名 1271筆
大軍拡に反対する請願署名
(1月1日現在) 284筆

● 署名活動について

街頭での「大軍拡・大増税に反対」の署名は、11/9は13筆、11/19は6筆、12/9は6筆、12/17は1筆でした。並行して行っている「東海第二原発の廃炉を求める」署名は、計8筆でした。

荒牧さんのギターによる「故郷」や、日下部さんのエレキ・バイオリンによる「アメージング・グレイス」の音楽に、立ち止まって聴いてくれる人たちもいます。私たちも、音楽に励まされつつ署名行動を行っています。

これからしばらく寒い中での活動ですが、皆さまも署名行動に参加していただければ感謝です。

● 1月3日 市民スタンディング行動

「9条改憲NO! 市民アクション連絡会」の呼びかけで、「パレスチナに平和を!」《金権腐敗政治は許さない! 真相究明を!》を掲げて、「新春 市民スタンディング行動」が1月3日、TXつくば駅A3出口で開催されました。

20名が参加し、各自がそれぞれのプラカードや横断幕で、「ガザ市民を殺すな!」〈パレスチナに平和を〉〈ロシアはウクライナ侵略をやめろ〉〈軍拡NO〉〈保険証を廃止するな〉等を訴えました。また、能登半島地震被災者へのお見舞いカンパの募金活動も行いました。



● 2023年「12.8 不戦のつどい」報告

1941年12月8日の真珠湾攻撃の日に因んで、つくば地区ではこの日の前後に「不戦のつどい」を開催してきました。

昨年12月9日(土)に、豊里交流センターで、石上徳千代氏(茨城県歴史教育者協議会)の授業実践「つくばの芝畑を教材にした戦争学習～なぜ、長野県の人がつくば市に来て芝畑を作ったのか～」の報告がありました。小学校で教鞭をとる石上氏は、地元で芝の生産が盛んな理由を子どもたちと考え、その過程で、長野県から満州に渡り、戦後つくば山麓に再入植して芝づくりを始めた人たちのことを知りました。そして、その経緯を自分たちで調べました。

つどいの参加者は、芝栽培の歴史と、地域の戦争の歴史を、次世代につなぐ活動のヒントとして学びました。

(実行委員会、学研労協・小滝豊美)

● 1月7日、つくば市 20歳のつどい

1月7日(日)、午前と午後の2回に分けて、20歳の門出を祝う市主催のつどいが、つくばカピオで開かれました。市内の中学校出身の参加者たちは、マスクなしで旧友と会う喜びにあふれていました。

20歳代表から「芯を持ちつつ柔軟な人間になる」と決意が述べられ、つくば市長は「能登半島での地震、ウクライナやパレスチナで続く紛争」に触れつつ、「困難な状況にある人に心を寄せ、その人たちのために尽くす人間に」との期待を伝えました。

9条の会つくばは、祝意と平和への願いを込めたチラシ入りのポケットティッシュを配りました。



● 「結」を置いてくださっているお店の紹介

(お知り合いを誘って、ぜひ訪ねてみてください。)

・天久保「サッフォー」=本と喫茶 ・天久保「花小路」=和菓子 ・天久保「千年一日(せんねんいちじつ)」=カフェ、絵画の展示も ・竹園「えほんや なずな」=絵本 ・北条「佳風(かふう)」=喫茶・軽食

● 百里平和公園「9条の碑」建立カンパ、再度のお願い

前号に続いて、賛同金募集のチラシを同封しました。国際ジャーナリスト・伊藤千尋さんのメッセージも掲載されています。

9条の会つくばでは、すでに5万円以上の個人カンパが寄せられており、会としても団体カンパ3万円(10/14の総会時の募金を含む)を予定しています。さらにご協力いただける方は、ゆうちょ銀行に振り込むか、当会の事務局員にお声かけください。

2月11日「百里初午まつり」の日に、竣工、お披露目の予定です。



沖縄で生きる人々・歴史を写し出す

石川真生・写真展 『私に何ができるか』

2023.10.13~12.24 東京オペラシティ アートギャラリー



戦後、米軍の「銃剣とブルドーザー」によって生きるための土地を収奪された沖縄では、今、辺野古の海の軟弱地盤の上に米国の新たな世界戦略基地を作ることを、日本政府がゴリ押ししています。設計変更を承認しない県を国が訴え、「代執行」するという暴挙を司法（高裁）が認めました。

* * *

沖縄を拠点に撮り続けてきた写真家・石川真生（まお）さん（1953年～）の個展が、東京で開かれました。沖縄の歴史と現在進行形の姿を、170点近い写真で問いかけます。

「大琉球写真絵巻」では、琉球国時代や沖縄戦、米軍・米兵による事故や事件・・・石川さんの知人らが役に扮して歴史的なテーマを再現した写真もあります。

1970年代以降、沖縄で暮らす人々や状況を撮り続けてきた写真は、石川さんと被写体が、立場を超えて当事者として接近する姿勢がうかがわれます。黒人米兵が集うバーで働く女性たちがくつろぐ姿、居酒屋に集う港湾労働者、武装訓練中の自衛隊員、「陸上自衛隊配備反対」のノボリの前で笑顔を見せる人々・・・そこには「生身の人間へ注ぐ平等な眼差し」（担当キュレーターの天野太郎氏）があります。国家と政治によって理不尽な状況に置かれる沖縄、その状況に声を上げる人々の姿が写し出されます。

石川さんは、「戦争の時にいっぱい沖縄人を盾にしたくせに、ずっと沖縄に基地を置いてるじゃないか」「日本人は知らん顔して平和をもらっている」と語ります。

展示に作品の解説はありませんが、入場者に配られる資料には詳しいキャプションが記されています。

例えば・・・

◀インフォメーション▶

- 「沖縄ノートを読む会」第3回
2月1日（木）14:00~16:30 竹園交流センター
- 百里・初午まつり
2月11日（日・祝）午前~午後（時間未定）
百里平和公園
- 「原発いらない・憲法守れ」
3・11昼休み集会&デモ（仮題）
3月11日（月）11:30~13:00
センター広場付近予定

・「大琉球写真絵巻」より：2014年1月、名護市長選で「自民党が推す候補者が勝ったら、500億円の名護振興基金を新設します」と、名護市民にカネをちらつかせた石破茂自民党幹事長。防衛省の辺野古埋め立て申請を許可した仲井眞弘多知事に「不承認」をつきつける、再選された稲嶺進名護市長。「違法な反対運動の妨害活動に警察と海上保安庁の積極的な対応が必要」と、島尻安伊子参議院議員が国会で政府に要求。

・「宮古島陸上自衛隊保良訓練場」：向こう側に見えるのは、私たちが住んでいる保良集落。隣接してミサイル基地を造り、集落と基地の境界近くに射撃訓練場が造られている。そして、手前に弾薬庫。かつて沖縄戦で、日本軍は住民を盾にして戦ったが、戦後、日本軍から自衛隊になった現在でも、何も変わらない。

* * *

私たちの日常生活の中に、いきなり大量の軍用車両（戦車、ミサイル搭載車・・・）が乗り込んできて、迷彩服の自衛隊員が街を往来するようになるという状況——本土の人間は、容認するのでしょうか。

展覧会のタイトルは、「私に何ができるか」です。

（後藤）

◀行動予定▶

- 1月19日（金） 安保法制反対スタンディング
13:00~14:00 大清水公園 学園線側
- 1月20日（土） 事務局会
10:00~12:30 竹園交流センター
- 1月21日（日） 定例署名
12:00~13:00 アルス会館前 遊歩道側
- 2月3日（土） 9条壊すな3の日スタンディング
13:00~13:30 つくば駅 A3出口付近
- 2月17日（土） 事務局会
10:00~12:30 竹園交流センター
- 2月18日（日） 定例署名
12:00~13:00 アルス会館前 遊歩道側
- 2月19日（月） 安保法制反対スタンディング
13:00~14:00 大清水公園 学園線側
- 3月3日（日） 9条壊すな3の日スタンディング
13:00~13:30 つくば駅 A3出口付近
- 3月16日（土） 事務局会
10:00~12:30 竹園交流センター
- 3月17日（日） 定例署名
12:00~13:00 アルス会館前 遊歩道側